
秋の夕暮れ

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋の夕暮れ

【Nコード】

N2088Z

【作者名】

K | Sayuto

【あらすじ】

ある秋の日、日本の人口は男子が1人減って、女子が1人増えたと思う。

高校で野球部に入っていた水木 秋次はある日起きると女の体になっていた？

よくある異世界物でもなくよくある転生物でもなく、よくあるなっちゃったパターン。神はむかっけー。

更新速度は出来る限りどんどん更新していきます。

まえがき

俺は水木 秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立っております。

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰って、家についたら風呂入って、リカーン見ながら飯食って、予習なんてめんどくせーと睡眠に入ったわけだ。

で、それがどうやったら今の状況につながるのかと考えている。繋がるどころか接点すらちげえ。そもそも次元がちげえよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認しようとして鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女なわけで。勿論オレツ娘って訳じゃない、いや他人から見たらそれ以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはずなんだよ。

第一話 俺が女に！？（前書き）

水木 みずき 秋次 しゅうじ

ある日起きると女の体になっていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパツチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木） 和枝 かずえ

秋次の母親でスタイルは良くとしの割に結構若く見られている。

田村 たむら 静流 しずる

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になってしまった事を家族よりも先に打ち明けられた。

第一話 俺が女に!?

「なんだよこりゃ」

鏡を見て放心する。少し経って俺はある物を確認しようと思った。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちそういやあさっきの声も妙に高かった様な……。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべえ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だって触ってみて感じちゃったりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなさーいとオカンの声がしたので俺は

「今準備ちゅー」

と危うく言ってしまいそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかった。何も返事がない事を不審に思ったのかオカンが階段を登って来ている。

ヤバイ、どうしよう。そうだっ、鍵をかけよう。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次ー、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさい」

とオカンがドアをノックしている。俺は

「風邪引いてるから今日は休む」

と言ってしまいそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべえほど辛いからうつらないように俺を隔離する”と綺麗とは言えない自分で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさい」

病院だつて、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねえだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいないからちゃんとなんか食べたりしなさいよ」

とオカンが去って行ったので一息付く。って、今ので打ち明けにくくなった気がするの俺だけだろうか？でもどうすりゃいいんだ？女の体の事なんかなーんもわかんねえし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

――
今日は秋次休みか、まっプリントとか持ってってやるついでにお見舞いでもしてやるーかなあと思ってみるけどいざそうしようと思うとめんどくせえ。

ピロロロ、

ん、メールか。っと秋次からだ。えっと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃあ今日来てくれ”と届いた。

今日は6時間授業だったが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には2〜3時間で終わった気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ来た。インターホンを鳴らすと誰もこなかったがメールで”開いてるからはいって”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで来た。

「しゅーじー、きつたぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が来たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあったので。

「なんの事だかわかんねえけど俺は信じるぞ」

と言うとガチャと鍵の開く音がしてゆっくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だった。

「あれ、秋次……の彼女？」

秋次には彼女はいなかったと思うが……、まさかこの事だったのか話って？と俺が思ったがその話はそれと全く違った物だった。

「ち、違う……俺が、秋次……だよ」

ナンダツテ？コノオンナノコガシユウジダツテ？

「ああ、同名か。でこの家の息子の秋次は？」

俺がそういうと秋次と名乗った女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は？何を言ってるんだこいつは、そもそも息子ってのは男だろこいつはどうみても女じゃないか。

「おいお前、冗談もいい加減にしとけ」

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言うと。そのいかれた女の子は一瞬ビクツと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろつつってんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさっきの喋り方のまま壁を叩いて言うと女の子はさっきよりも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言ったのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言うように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさっきの表情のままそう言ったので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余ってたお前を俺が誘った時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、さらに」

ってこいつ本当に全部当ててやがる、本当に秋次なのだろうか？
・・・ってなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃあ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

ここまで言われたら信じる他ない。でもなんで女の子の姿なんだ？

「実は・・・今朝起きてみたら女になってて、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言っただけの子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておく秋次の顔が真っ赤になってた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あつ、わりい」

俺は慌てて手を離れた。

「それで、お前の両親は知ってるんだよ・・・な？」

一瞬ピクツと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかったかって？だてに幼馴染やってねえよ。

「お前ならもうわかったよな、それで、お前から俺のオカンとかに言ってくれないか？」

どーせそう来ると思ったさ、まあ親友が困ってるのを見過ごせないし。

「わぁーっ たよ、その代わり今度奢れよ」

「ありがとな」

「っへ、今更感謝すんなよ気持ち悪・・・くもねえな、今のお前なかなか可愛いぜ。ぜってえーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。にしても、改めて思ったけど・・・お前背たけえな」

俺が高いんじゃないとお前が小さいんだそう思ったけどまあ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になって2〜3回りくらい小さくなっ
たと思う。と俺が考えていると。

「ただいまぁー」

秋次の母親が帰って来た。さあて、ミッションスタート。

第二話 とりま、ミッションコンプリート？

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言つと静流は任せると言つて下に降りて行く。俺も才力に見つからないように降る。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い？」

「まあ、そんなところです」

「そういつもうちの子がお世話になってるわねえ」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おい、こいよ」

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は？」

オカンが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこうなつてたみたいでさっき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次？本当に秋次なの？」

「ああ、オカン。俺だよ秋次だよ」

「まあ、なんてこと。こんな……可愛くなっちゃってへ？」

直後俺はオカンに抱きしめられた。あれ？オカンの胸がめっちゃあたたってるけど興奮しない、ってか親に興奮するわけないか。

「オカン、疑わないの？」

「静流君だつて言ってるし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さんには私から言っておくわ。これからの事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカン。ありがとう」

「あ、秋次。今日からオカンじゃなくてお母さんって呼んで頂戴。それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言ったことはないから少し恥ずかしいがこのさいしょがない。

「わかったよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒ににいてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにね」

まっとお母さんなぜ最後のほう笑ってたし。なんかこええよ。

「はい、できる限り間違いは犯さないように頑張ってみます」

っておい静流完全拒否しろよ。

「さあて、上に行こうか」

静流がそう言っただけ俺の腕をつかむ。こええよ、前の俺だったら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてるから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときってこんな感じなのかなあ？

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻ってきた。

「それにしてもお前本当に女になったんだなあ、力とか全然なくなってるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だっってお前さっき本気で俺の手を振りほどこうとしてただろ」

それは本当のことだった、本気でふりほどこうとしたがビクともしなかった。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに（とあることにより全治2週間のけがを負わさせられた過去あり）さっきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でもなにか変わっているかもしれない。

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか？」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になったと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思っていると、急に扉が開きお母さんが入ってきた。

「秋次やったわ、お父さんがうまくやってくれるって。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいって、準備しなさい」

「準備つたってどうすりゃいいんだよ」

「着替えに決まってるでしょ」

あー、着替えですかそうですか。って着替え？まてまて、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、ってよく考えたらこの美少女って俺じゃん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねえよ。でも待て、着替えたら見えてしまふんじゃないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「どーした秋次、顔真つ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんかつたぞ。

「う、うるせえ。ってか静流はとつとと出る」

「そうねえ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しこつちを見る。

「さあ、着替えなさい」

は？

「いや、お母さんが着せてくれるんじゃないの？俺目閉じてるから」

「何いつてんのよ、これからその体で何万回も着替えることになるんだから早めに慣れときなさい。それに」

それにつてなんか怖い予感が……

「こんな美少女が恥ずかしがりながら着替える姿って可愛いじゃない」

こんの、あ・く・ま。

第三話 身近な落とし穴（前書き）

水木 みづき 柚木 ゆずき

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

第三話 身近な落とし穴

結局俺は、女物の服などを持つてゐるわけではないので（持つていたら変態だつてwww）ジーパンにパーカーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・、俺が普段着ている服は全部ブルブルだったので俺が小学生の時に着ていた服がぴったりだったので助かった。お母さんがとつておいてよかったと思う。

「それじゃ静流君、お留守番頼めるかしらねえ」

「ええ、大丈夫です。秋次、まあがんばつてこい」

こいつ顔では真剣な振りしてるが内心では面白がつてるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてるじゃねえか。帰ったらいろいろといじつてやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒつてこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だったのは良かったんだ、多分・・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドックやられたり、拳銃の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たつて声をあげてしまった。肌の感覚がすごい敏感になつてた・・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になつてしまった事だがそれに連動して肌の感覚が敏感になつてた、まあ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになつてた事かな、もしかしたら涙もろくなつているかもなそれは結構つらいな。これから先こんなんでやつてけるのだろうか？まあ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座つて待

つてると一人の男が目の前に現れた。

「やあ秋次、気分はどうだ？」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン・・・、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。

俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは？」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいつそ名前も変えてしまおうと母さんと話し合ったんだ」

いつの間に話し合ったんだよ、それにしても結構親って子供の事を考えているんだな。深くそう思うよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが大変だろ。だから、お前の字からとってあきだ、漢字はそのまま秋でどうだ？」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまあそこはやっぱ慣れるってことか。漢字を間違えう事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言ってポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木 秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなに驚くな、もうすでにつくっておいたんだよ。お前がいやだって言ったら再発行しようと思ってただけだ。そうそう、検査結果だがいたって健康」

「本当か、よかったあ」

「そう早まるな、いたって健康じゃなかった」

え？今何て？

「お前は重度の日光過敏症でな。まあ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかったと思うのだが昼間は日光に当たってはいけいないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過ぎるといろいろと大変なことになるから気をつけろ」

それはそれは、相当つらい。俺これから生きていけるか自信無くなつた。

「で、お父さんもしかして……戸籍も変えられた？」

「はっはっは、心配するな。しっかりと水木 秋 性別女に変えたぞ」

どうやら戸籍とかの心配は必要なくなったようだな、いったいどんな手段を使っただのやら。

「そうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか?」

「違う、いたって健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだって? お金あげるから彼と一緒にどこかでたべてきなさい。お釣りはこずかいにでもしなさい、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

そう言ってお父さんは財布から1万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんじゃないかと思うがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにもらっておく。うっひゃ絶対7千円程度余るぞ(笑)。

「わかったアネキは?」

「そっちは聞いてないが多分今日も遅くなるんじゃないか?」

「ふぁーい」

そういつて俺はあくびをしながらドアノブに手をかけようとするが。

「ぐぶっ」

どうやら身長が縮んでいたののでドアノブ(もともとここのは普通

のより高い位置にあつた）が顎にあたつた。

「大丈夫か、秋？顎が赤くなつてゐるじゃないか。女の子になつたんだから体を大切にしなさい」

「ふわあゝい」

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもなあ………。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事を全く考えていなかった。THE灯台もと暗し……。だな。

第四話 危ない訪問者（前書き）

田村 たむら 佳代 かよ

静流の妹で俗に言う……。いろいろな危険な人物でありどうやら秋次もとい秋の事が好きなもよう。

第四話 危ない訪問者

「かえったぞ」

俺は家の扉を開けながら言つと奥から一人の男が歩いてきた。静流だ。

「よお、どうだった？」

「どうだったといわれてもなあ、いろいろとあった」

俺がそういうと「何があった？」と聞かれた。出来れば聞いてほしくなかったような気がするような気がしない様な……。

「なんかさ、戸籍とか普通につくりかえてもらったし改名もしちゃったし。でも一番は……この体に持病があった」

「持病！？それでお前は大丈夫なのか？命にかかわるような事なのか？えっと、それで」

「落ちつけよ、お前の事じゃないだろ」

「俺の事じゃなくてもお前になんかあったら俺だって悲しいんだぞ」

急に静流は怒鳴り俺は一瞬ビクリとしてしまいすこし後ずさってしまった。

「わりい、急に怒鳴って。でもな、ちゃんと親友としてお前を心

配してんだからな。それで病気はどうなんだ？」

「うん、日光課金病？だっけか」

「日光過敏症の間違いか？」

「そー、それぞれ」

静流はフムと考えた後。

「じゃあ、今度必要なものでも買いに行くか？」

必要なものとな？

「何が必要なんだ？つて顔してんな。要するに日にあたっちゃいけないんだから日傘とか日焼け止めとか帽子とか必要なんじゃないのか？」

「なるほー、さっすが静流だな」

と俺が言ったところで・・・ピンポン・・・とインターホンが鳴る。

「あ、静流待つとけ出てくるから」

と俺は行って玄関まで行き扉をあけると。

「すいませ ん、うちの兄がお世話にな、つつつつっ！？」

そこには一人の女の子、静流の妹の佳代ちゃんがいた。

「どうして、先輩の家に女の人が……。まさかつ、先輩の彼女？」

「いや、ちがつ」

佳代ちゃんは目を虚ろにし四次元には通じていないポケットからたたたたたたーんという効果音もなく一つの折りたたみ式ナイフを取り出しそれを広げ両手で持つ。

「先輩は私だけのもの、誰にもやらない」

佳代ちゃんはそれを俺に突きつけ飛びかかってくるが俺はそれを紙一重でよけるが動きの要領が違っていたので本当だったら普通によけられたはずがこけて倒れてしまった。いきなりながら大ピンチ、この小説はもう終わるのか？

「なんか、私の第六感が貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒に言ってるけど私は悪い子だから無視しちゃうね」

いや、その通りだよ。無視しないでくれ。ってマジでヤバイ、死ぬ前に行っておくさっきのメタ発言すいませんしたー。

佳代ちゃんはナイフを振り上げる。終ったと俺は思ったがいつまでたっても痛みは来ない。ああ、痛みもないまま天国へ行けたのは幸いだっとな。

「やめろ佳代！」

俺はそんな声が聞こえたような気がして目をあけると佳代ちゃん

の手を押さえている静流が目映った。

「お兄ちゃん！？まさか……。そう、先輩の彼女じゃなくてお兄ちゃんの彼女だったのか。でも、お兄ちゃんも私だけのものなんだからどの道ここであなたには三途の川を渡ってもらおう」

佳代ちゃんは静流の手を振り払い俺にナイフを振り下ろす。今度こそ終わったな、天国では俺どんな姿なんだろ。男に戻ってたらいいなあ。と覚悟を決めるがまたもや痛みはなかった。今度こそ目を開けたら目の前に川があるんじゃないかと思う、それとも異世界に転生でもするのかな？俺はそう思い目をあけるとそこは俺がよく知っている場所、俺の家の玄関だった。

「あれ、生きてる？」

俺は顔をあげるとそこには悲しそうな顔でナイフを持っていない佳代ちゃんがいたナイフは佳代ちゃんの足元に落ちていた。

「どうして、貴女が先輩なの？」

俺は少しの間意味がわからなかった。

「どうして、女になっちゃったの？」

俺は静流が話してくれたのだと思ったがそんなすぐに信じるわけもないと思って静流のほうを見るとのびていた。多分振り払われたときに頭でも打ったのだろう。

「どうしてなの？なんで、こんなことになってるの先輩」

まさか、見破ったのか。この人は看破眼の持ち主ですか？と思っていたがさつき行っていた事を思い出す。“第六感”とか“貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒に”と言っていた。まさか本当に第六感をもっているのか？

「本当に俺だよ、秋次だよ。でも、どうして俺だってわかったの？」

「うん、先輩の心と一緒に澄んでいて暖かくて、それに心紋が同じだったから」

「心紋？」

「心紋っていうのはね、指には指紋があるでしょ。それと同じようなものが心にもあってそれが心紋」

すごい、佳代ちゃんは人の心を読む事が出来るのか？俺はその事をすごく聞きたいと思ったがあまり他人に詮索されるのは良い気がしないと思ったので俺はやめておいた。

「ごめんなさい先輩、本気で・・・殺そうとしてた」

「いや、もういいんだよ。それより静流は？」

俺は静流のほうを指さし聞いてみると佳代ちゃんは静流の額に手を当てるところこちらを向いて。

「大丈夫、脳内出血もしてないし軽い脳梗塞だから命に別条はないよ。起きたときにちょっとふらふらするかもしれないけど」

すごいな、第六感ではこんなこともわかるのか。

「それより、先輩大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。っと」

俺は少しフラツとして佳代ちゃんに支えられる。さっきまではいろいろあつて気がつかなかつたけど佳代ちゃんの目を見るときに顔を上げる必要がある。それはつまり……。

「ちつちやい先輩も可愛い」

と佳代ちゃんに抱きつかれた。佳代ちゃんももともと同学年の中では小さい方らしいが俺はそれよりも小さかった。なんか、自分はちつぱけだなと思う。

第五話 他に変わった事（前書き）

なんか、エロくするつもりはなかったんだけどこういうジャンル（女体化）の小説を書く場合って相当なテクニクがないと回避する事は無理だと思う。ちなみに俺にそんな技術はあるはずない。エロいのが苦手な人は今すぐ右回り360度回転して歩を進めたほうがいい。結局はこっちに来るっていうね。

第五話 他に変わった事

俺が佳代ちゃんに抱きつかれてから数秒後、静流が起きた。

「あれ、ここはだれ？俺はどこ？」

とふざけていたが俺と佳代ちゃんは華麗にスル　した、いい加減降ろしてほしいと思ったのだがどうやら俺は佳代ちゃんよりも力がなくなったらしくなんか抵抗しても無駄で終わる気がするのであきらめる。

「あ、そうだ。晩御飯をどっかで静流も一緒に食べろって言うってたけど佳代ちゃんも来る？」

「うーん、お兄ちゃんは行きたいんでしょそうでしょ。しょうがないなあ私がお母さんに電話しといてあげるよ。どうせ今日はマドナルドって言うってたし」

佳代ちゃんはそう言うって携帯を取り出し電話をかける。

「うん、そう、だから今日は先輩とお兄ちゃんと一緒に食べてくる。うんじゃあ……。おっけ大丈夫だったよ。よし、早速行く」

俺はそこでどこへ行くのか考えていなかったのだがあまり遠くへ行くのもめんどくさかったので近くのサ　ゼリアへ行くことにした。やっぱ狙いはミラノ風ドリアとミックスグリルだな。あの肉汁はたまんねえよ。

俺たちは家を出てサイゼリアへの道を歩みだす。

さっきのまでの威勢はどこに行ったのやら結構恐ろしい事になっていた。とりあえず入店した時までさかのぼっておく。

「私はなににしようかなあ、秋先輩はどうするんですか？」

「うーん俺は……ってなんで俺が名前変えた事知っているの？」

「そりゃ、第六感ですよ第六感。ちなみに先輩がスリーサイズ測った時の恥ずかしー出来事までわかりますよ」

わー、その事を言わないでくれえもう思い出したくない声が出てしまった、まだそれだけならセーフだと思う。でもその声がちょっとエロかったんだよね。やったら俺からあんな声が出るんだよ。

「秋次なんかあったのか？ともう秋なのか」

季節が？俺の名前が？と思ったがおそらく後者だろう。

「お兄ちゃん、女の子には男の子にはわからない事があるんだよ」

「そういうものなのか、そうか秋。お前ももう立派な女の子への仲間入りだな」

「それじゃあ私GLですね。そうだ、もう先輩は全部が女なんだ。それはつまりぼそぼそ」

そのぼそぼその所は聞こえなかった、うんきつとそつだ聞こえなかったんだ。

「あーもうっ、やけ食いしてやる。ミラノ風ドリアとミックスグ Ril 注文だあー」

「先輩はそれですかじゃあ私もミラノ風ドリアで」

「じゃあ俺はリブステーキだ」

皆がそれぞれの注文が決まり、ボタンを押し店員に注文する。しばらくたち料理が運ばれてくる俺はミックスグ ril にナイフを刺し込み肉を切りフォークで肉を口に入れる。食べる前までは食欲がすごくあつたのだが肉を口に入れた瞬間にその気持ちは全て霧となつて消えうせた。

「肉が・・・まずい」

「えっ？どれ一口・・・ん、全然うめじゃんか」

俺はまさかと思ひ嫌いなはずのコーンとグリーンピースを食べてみると、案の定めちやくちやうまかつた。

「あー、先輩味覚も変わっちゃったんですか可哀想に。今の先輩にとつて肉は大嫌いなものなんですよねちなみに野菜は全部好きになつてますし先輩の嫌いな甘いものなんて食べるのが止まらないくらい好きになっちゃってますよ」

「秋、それは俺が食つてやるから。そのドリアだけは食つとけ」

「ああ、肉が食べれないなんて……」

俺は肉が食べれない事に悲壮感を感じながらドリアを食べるがドリアが3分の1ほどなくなった時に今度は満腹感に襲われた。

「静流、俺もう腹いっぱいだ」

「マジかよ、お前こないだまでこれ3つは食べただろ」

「ふえんふあいほふあふえふえふほう「佳代、口の中の物を片づけてから話せ」

と佳代ちゃんが口の中に物をたくさんつめたまま話すがすぐに静流に制止される。

「はあ、腹がいっぱいで苦しい。水飲もう」

俺は水を飲むがそこである事に気がついてしまった。今日、一度もトイレに行っていない。もう漏れる寸前だという事に気がつき俺はあわててトイレに駆け込むがそこでさらに危機に陥った。一瞬間違えて男子トイレに入ってしまったと思ったがここは男女関係なく洋式が1つだけある事を思い出し安心する。だが俺はトイレの仕方がわからなかった。

「ヤバイ、漏れる。どうすりゃいいんだよ」

俺が深い絶望感に襲われていると。

「先輩開けて」

佳代ちゃんの声がして俺は急いで扉をあける。

「どうしよう、俺女子のトイレの仕方わかんねえよ」

「先輩ズボンとパンツ降ろして便座に座って」

俺はすぐに言われたとおりにしてズボンを下ろしパンツをおろそうとしてあわてて目を閉じて降ろし便座に座る。すると、俺の小さい胸が佳代ちゃんにわしづかみにされる。

「あっ」

また声をあげてしまったが佳代ちゃんは気にせず手に力を入れる。そして俺は全身から力が抜けた。その時なにか水がはじける音がした多分俺の尿が出たんだろう。というかいつまでも佳代ちゃんが胸をわしづかみにし続けるせいで体がだんだん熱くなっていくような気がして俺の呼吸が乱れて行った。

「ハアハア、か、よちゃん、そろそろ、はな、して」

「あ、先輩すみません」

ヤバかった、俺が俺でなくなるまで数秒前と言ったところだった。今は………感じてしまったというやつなんだろうか、それにしてもすごく、気持ちがよかった………。

「先輩、顔真っ赤だけど大丈夫？」

「うん、なんか今俺が俺じゃなくなるかと思った」

「ごめんなさい先輩ちょっとやりすぎちゃったかな、でもこれ
先輩が感度高いつてわかったからこれからこういう事何度もやっ
ちやうかも」

それだけは勘弁して下さいマジで。俺マジで恐怖症になるかも・
・・・。

第六話 再認識

結局、佳代ちゃんがやった事はただ単にやりたかっただけだったという。そのせいで俺は……………。

「先輩大丈夫、一度出来ればそのあとはもう出来る…………はず」

「なんか、やっぱいいや」

何というか最悪な1日だった。この後も何もない事を願いたいね。俺が軽くブルーになりながら席に戻ると静流が少し気にしていたようだが声はかけてこなかった。お前はホントに空気が読める友達だな。俺がそう思って席に着くと先ほどまであった食べ物は何も消えていた。

「まさか静流、お前全部食べてくれたのか？」

「ああ、つたく今度からしっかり考えてから行動しろよな。まあ、美味かったからいいけどな」

「ああ、ほんとに悪いな。っとそろそろ出るか」

俺がそう言っただけで伝票を取ろうとして手を伸ばすが誰かの手が俺が取るうとした伝票をとった。

「いいよ、俺が払うから」

それは静流だった。

「マジで、サンキュ」

にゃっは、これでまるまる1万円は俺のもんだあ。俺が内心でそうカーニバルを起こしていたが次の静流の一言で静まった。

「女の子に払わせるのもあれだな」

「やっぱり俺が払う」

そう言っただけで俺が伝票をかすめ取ろうとしたが、ヒョイと俺の手の届かない高さにあげられてしまった。

「おれがはらう」

「払いたければ俺から伝票をとる事だな」

おのれえ、こいつ人がめっちゃ小さくなったのをいいことに今まで出来なかった意地悪をするとは。畜生こいつでけえ、俺が男のときは間違いなく俺のほうがかかったのに。俺は出来れば使いたくなかった最終奥義を使う事にした

「くらえっ」

「なっ、何をする秋離れろお」

俺が使いたくなかった最終奥義、それは俺が静流に抱きついてそして静流が俺を離そうと手を下げたときに伝票をかすめ取る、最高な方法だ。ほら見る、もう伝票が届く位置にあるぞ。いまだあ。

「お前は考えがわかりやすい奴だな」

またヒヨイと上にあげられてしまった。

「おのれえ、静流めえ。あきらめて俺にそれをよこせえ」

「いや、あきらめるのはお前だろ？」

うつ、くそ。あきらめるか。そういえばさっきから後ろから邪気がするのだが何だろう。俺がそう思って後ろを見るとそこには佳代ちゃんがヤンデレモード(?)でそこに立っていた。

「お兄ちゃんばっか、ずるいよ。私だって・・・私だって・・・先輩をギョツとしたい」

は？

「もう我慢できない」

そう言って佳代ちゃんは抱きつく。なにか柔らかいものが顔を埋めて窒息するかと思った。

「はなせえ」

「後5分」

いや、後5分っておきるのを先送りしてる人じゃないんだから。俺は頑張っただけ出そうとするが無理だった。

「じゃ会計すまずぞぉー」

静流はそう言ってレジに行く。どうやら完璧にあきらめるとい
事だろう。

それから5分後に俺は離してもらい、今俺は3人で夜の道を歩い
ている。

「で、秋は明日学校行くのか？」

「うん・・・、なんかお父さんが学校にももう伝えてあるらしい」

「そうか、まっ頑張れや」

「他人事みたいだな」

「他人だろ？」

なっ、こいつひでえ。大切な友達が困ってるのに他人事だか
らって知らないふりかよ。

「そんな顔すんな、本当に冗談が聞かないやつだなお前は。出来
る範囲内でサポートするよ。ラッキーなことに席も隣だしな」

「えっ？お前の席と俺の席は結構離れてるだろ？」

「まだ言っ てなかったな。今日席替えしたんだよ」

なるほど、それでか。結構ラッキーだな。

俺たちがそんな話をしているうちにいつの間にか家についていた。

「じゃーなー」

「おう、お前一人だししっかり戸締りしろよ」

「じゃあーねー先輩」

そして俺は一人になり家の扉を開け中に入る。今日はいろいろあって疲れてるしとつと風呂に入って寝ちまおう。そう思い俺は風呂場に向かい。相当根性を出して服を脱いだ。

「こうして見てみると、本当に可愛いな。なんか肌も白いし腰も細い」

残念ながら貧乳だな。って何を考えてるんだ俺は。

「さつさと風呂入っちゃまおう」

俺は頑張ってからだとかを洗ってから風呂に入る。俺は風呂は好きだった。気持ちよくて温かいからな。でも今回は入って数分でのぼせた。頭がぼーっとして思考回路が全く動かなく、ただ俺の生存本能が告げていた。これ以上風呂に入ったら危険だと。俺はぼーっとしている頭で風呂から出てタオルを取ろうとする。そこで意識が途切れた。

第六話 再認識（後書き）

感想や修正点ありましたらジャンジャンどうぞ

第七話 目覚めの良い朝

学校の一室で俺は明美さんに告白した。

「ごめんね、秋次君。私あなたの事を好きになれない」

「どう、どうして？」

「だって、……あなたは女の子でしょ」

え？俺は体を良く見てみる。なんと俺は身長が物凄く低くなっていて男ならだれでも持つてる如意棒と宝玉がなかった。

「そ、そんな馬鹿な」

「さようなら秋次君」

明美さんが走って行ってしまふ。

「まって明美さん」

俺は追いかけるが体が小さくなっている為足も物凄く遅くなってしまう。からずに見失ってしまった。

「そんな、どうしてこんな……」

俺はブルーになりながら家に帰っていた。

「よお、どうした秋」

静流が現れた。

「ああ、静流か。実はさ……明美さんにフラれちゃったよ」

「そっか、……秋」

俺は返事をするがその時気がついた。あれ？こいつなんで俺の事秋って呼んでるんだ？俺がそう思っていると静流が顔をちかずけて言ってきた。

「秋、そんな奴の事は忘れて俺の彼女にならないか？」

「は？お前何言ってるんだよ俺は男だぞ」

「お前こそ何言ってるんだよお前は立派な女じゃないか」

そう言つて静流はさらに顔をちかずけてくる。そして俺にキスをしようとしてくる。

「うわああああああ」

……ドガッ……

「いってえ、頭打ったあ。ってここは俺の部屋？」

俺はベットから落ちて頭をうっていた。それを意味する事はつまり……。

「そっか夢だったんだ、そうだよ男が急に女になるなんて馬鹿げ

た話があるもんか。長い夢だったな覚めてよかった。あー、なんか気分がめっちゃいい」

俺は時計を見るとまだ6時だった。今日は特別気分がいいような気がしてもう学校へ行くことにした。俺は壁に掛けられている学ランに手を伸ばしハンガーから引つ張るように学ランをとり俺は着替えた。その時に何故か着にくかったような気がしたがたいして気にもせず別に腹も減っていなかった。なので朝飯は抜きにして革靴を履いて家を出る。

玄関の扉を開けると外は雨が降りそうな天気だったので俺は折り畳み傘がバックに入っているか確認してそのまま家を出る。妙にバックが重かったがそれもまた気にしなかった。革靴がブカブカだったの다가多分お父さんのと間違えたのだろうと思った。

あれ？俺なんでお父さんって思ったんだ今までオトンって言うってたのに・・・まあいつか。

そんな事を考えながらしばらく歩いていると前に一人の男子生徒が見えた。

「おーい、静流」

「お、秋か今日ははええな、どうした」

「いや、なんか妙に目覚めがよくつてよ」

俺がそう言うと静流は少し顔に笑みを浮かばせた。

「よかった、よく眠れたんだな。あんな事があつたから眠れない

かと思つてただけ。それにしてもお前妙に顔赤くないか？」

「あんな事？昨日なんかあつたっけ？」

「は？お前何いつてんの昨日女になつたつて騒いでたのはどのどいつだよ」

まさかだつてあれは。

「っそ、そんなあれは夢だろ。清流までどうしたんだよ。俺が見た夢と同じ夢を見たのかよ、すごい偶然もあるんだな。そういえばお前身長急に伸びてないか？」

俺がそういつと静流は手を額に当ててあちゃーってポーズをとり。

「秋、これを見る」

静流は鏡を取り出す。コイツ鏡なんて持ち歩いていたのかよ。俺がそう思つて鏡をのぞきこんでみると俺が映っているはずのところに美少女が映っていた。

「何だこれ、新手のびっくりか？カメラはどこに仕掛けてあるんだよ」

俺がそう言つてまわりを見るしぐさをしていると静流が俺の胸に手を当てた。

「ひゃう」

その時俺は変な声をあげてしまった。

「なっ何すんだよ」

俺が少しあわてていると静流が。

「まだ気がついてないのか。お前が夢だと思っているのは夢じゃない、それはうつつだっ」

うつつ？うつつ・・・うつつ、うつつ・・・ああ現か、現つていうとたしか現実つて意味だったな。それはつまり・・・。

「ないっ、ないっどこへ行つたんだ俺の　と　は」

「おいっ、女の子がそんな卑猥なピーっとかの効果音で消えてしまいそうな言葉を叫ぶな、そこいらのサラリーマンがこっちを見るじゃんか」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ。俺はしばしの間放心状態になった。その時あたりが次第に明るくなり始めた。

「おっ、晴れてきたな」

静流がそう言ったのを合図に俺が放心状態から回復して目をあけるとそこにはまばゆい世界が広がっていた。

「うつ、まぶ・・・しい」

「えっ、あっ」

静流はそう言うってから学ランの上を脱いで俺にかぶせた。

「なっ、何すんだよ」

「お前日光過敏症だろ。あんまり日にあたるんじゃないやねえ」

そうだ、しかもお父さんは重度のつて言つてた気がする。まさか命にかかわるのか？と俺が思っていると。静流が急に俺を抱き上げ。

「学校まで走るぞ」

と言ってそのまま走って行った。俺はされるままになっていた。

第七話 目覚めの良い朝（後書き）

小説を書いているときにふと気がついた事があります。それは・・・
チャック全開じゃったわ／＼／＼ｗｗｗｗ

感想や修正点などあつたらお願いします。

第八話 俺の居場所

「ゼエゼエ」

「静流大丈夫か？」

静流は明らかに疲れ切っていた。まあそりゃ俺を担いだまま数百メートルも全力疾走してたからな。

「全く、ゼエ、問題、ゼエ、ない」

「多分誰から見てもお前は今疲れきつてると思うぞ」

しかし流石陸上部。30秒ぐらいで呼吸を整えた。

「で、どうするんだ？まずは・・・普通に考えて職員室に行く事だよな」

俺は結構しんどそうに歩いた。これから起こる事を考えたらしんどく思わないほうがいい。一人の女の子が学ランを着て昨日の朝起きたら女になってましたなんて誰が信じると思う？俺だって信じられないよ。

俺は下駄箱の前まで来てある事に気がついた。俺の下駄箱が一番高い位置になり男のときでも少し手を伸ばす必要があった。それがこんなに小さくなったらどうなると思う？届くわけないじゃないか。俺が困っていると。

「やっぱりな、手が届かないんだろ。とってやるよ」

静流が来てくれた。こいつって女視点からみると結構イケてるやつじゃないか。俺が女だったら惚れてるかもな。おっと、あくまで女として生まれていたらだからな。

俺は静流がとってくれた靴を履いて職員室に向かう途中に、担任に遭遇してしまった。

「おや、君は秋次く、秋さんね。事情はお父さんから聞いているから安心しなさい」

え？お父さんが。あの人ナイスだなあ。

「とりあえず、これが出来てるから更衣室で着替えるといいわね」

先生がそう言って一つの箱を渡してきた。何だこれ？俺はそう思いつながら箱を開けてみると中に入っていたのは女子の制服だった、俺が通っている学校は男子は学ランで女子はブレザーでおまけに超がつくほどのミニスカだ。俺がそれを見ているとある事に気がついた。

「え、まさか。これを着るなんて言いませんよねえ？」

「何を言ってるの、これ以外に何があるっているの。はい、これ女子更衣室の鍵と制服と一緒に届いたものがあるわ」

「えっ、ちょ、俺が女子更衣室を使うのはまずいんじゃないんですか？」

「何いってるの、可愛い美少女が女子更衣室使って何がいけない

の？」

たしかに今の俺の体は女だが中身は男だぞ。って言っても無駄か。それにしても一緒に届いたやつって何だ？俺がそう思ってた開けてみると中にはパンティーなるものといかにも女子が着るようなヒラヒラしたシャツが入っていた。つまり、これを着るという事か。

「そうそう、お父さんが秋さんは今日休むって言ってたけど結局来たの？」

お父さんが今日は休むって言ったのか。なんでだ？俺はそう思うがわからないのでとりあえず女子更衣室で制服に着替えることにした。ブラとかはなかったのでホックの心配はなかったがいろいろと女子の制服を着るのには抵抗があった。それになんてこんなにミニスカなんだよ、靴下が通常のサイズで足がめっちゃ露出しているのだが気温は低いので物凄く寒かった。俺は静流が更衣室の前で待っていたので早めに出た。すると静流が俺の体中を良く見てから。

「すっげ、可愛いなお前」

「可愛いとか言うな、この服装はめっちゃつらい。羞恥心とかめっちゃスースーして寒いし」

俺は静流に可愛いと言われたときに体が物凄く熱くなった気がした。まさか俺は照れているのか？いやそんなことはない。これは、そう・・・ただ恥ずかしがっているだけだ。

俺は着替えた後に職員室に戻りそのまま朝のHRまで待機しHRクラスの皆にうち明ける事になっていた。

「それじゃあ秋次く……じゃなくって、秋さん入って」

俺は先生に呼ばれ教室に入る。事情等はあらかじめ先生が先ほど説明してくれたので俺は説明する手間が省けた。俺はゆっくりと教室に入ると皆の間でどよめきが起きた。どうせキモイとか言われているんだろうな。つい先日まで男だったやつが急に女になってるんだもん。そう思わないほうがありえな……。俺がここで頭の中で言っている事を遮ったのは女子達の言葉だった。

「キヤー、可愛い。こっち向いて」

とそれに続き男子が。

「秋次、じゃなかった秋ちゃん俺と飯を食おうぜー」

とか言ってるやつがいる。まさかこいつらは。

先生が俺の考えている事を呼んだように言う。

「どうやら、彼らは貴女の事を受け入れてくれるみたいですね」

俺はそれが嬉しかったが勘違いだったらいやなので一応聞いてみることにした。

「あの、皆は……俺の事、受け入れてくれるのか？」

俺が聞くと皆は「当たり前だろ、お前がたとえありんこになっちまっても大切な友達だよ」とか「秋次君は、女の子になって名前が

変わっても私たちのクラスメイトだよ」とか言ってくれた。

俺はうれしくって泣いてしまった。そして男子から女子まで皆が俺の周りに集まってきてこれからも宜しくなとか言ってくれた。

「皆、ありがとう」

「秋ちゃん、泣くなよ」

静流がそう言ってハンカチを渡してくれたので俺はそれで涙をぬぐった所で。

・・・ガラッ・・・

扉が急に開き皆がそつちを見るとそこには一人の男がたっていた。

「お、お父さんどうしてここに」

俺はそう言った。

第九話 俺って鈍い？

そこにはお父さんがたっていた。
なぜここにいると思って聞こうとするがそれは遮られた。

「全くお前は、熱が39・5度もあるってのに良く普通に学校来れたな」

「へ？」

39・5度って普通相当つらいはずだが……。もしかしてさっきまでの体が熱いと思っていたのはそれか。俺ってそんな鈍くなってたんだ。39・5度と聞いてクラスがざわざわしている。

「今朝帰ってきたと思ったらお前が風呂場で倒れてたんだよ。多分のぼせたんじゃないか一応体温測ってみたら39・5度行ってたんだよ」

お父さんがそう言っただけでそのあとに静流が俺のデコに手を当てた。

「えーつと……。ってあつう。お前良く普通にいられたな。これは相当やばいぞ」

俺も自分のデコに手を当ててみるがからだじゅうが熱くなっていたからよくわからなかった。

「あの先生、今日は早退させたいんですがその際に静流君をお借りしたいのですがよろしいでしょうか？」

「ええ、良いですがどうして静流君なのですか？」

お父さんに先生が聞くと。

「静流君は家が近いのでいろいろとこれから世話になると思うので秋の事についていろいろと話しておきたいのですよ」

「そういう事なら了承しましょう。静流君、あなたは良いですか？」

「はい、俺は大丈夫です」

そして俺と静流はお父さんが運転する車に乗って俺の家に向かう。車に向かうまではあまり無理させないためにと静流が俺をおんぶしてくれた。あいつにはそのうちたくさんお礼しないと。俺はどうやら車に乗っているうちに眠っていたらしく気がつく俺の部屋の俺のベットで寝ていてその時には二人の話も終わっていたらしく静流は学校に戻っていた。

「俺、これからどうなるんだろうなあ」

と呟いてみるがむなしく何も帰ってこなかったし俺はずいぶん疲れていたのもう寝ることにした。

どれくらい眠ったのだろうか、お父さんに起こされ俺は体温を測り平熱（男だった時の）になりそれを確認してお父さんは話始める。

「お前には病気の事を重度と言っておいたはずだが覚えてるか？」

「うんまあ」

多分日光過敏症の事だろう俺は返事をする。

「その事なのだが、お前をだましていたようで悪いんだが本当は軽度なんだ。重度と言っておいて静流君がどれくらいお前の事を思っ
て行動してくれるか調べておきたくて彼にどう対応したのか聞いた
が彼はやさしい人だな。俺は秋を彼になら任せていいと思ってい
るぞ」

その言い方結婚するみたいない方なんだが、そう聞こえるのは俺だけだろうか？

「他には、まああまり長い話もなんだ、何かあつたら彼に甘える
といい。それだけだ、あと今日愛華が帰ってくるらしいぞ」

愛華と言うのは俺のアネキで今高校3年だったはずだ。遠い学校で寮生活なのでお正月と黄金週間とお盆とあとたまに気が向いたときくらいにしか帰ってこない。たぶん俺の事を聞いて帰ってきたのだろう。俺が今相当恐れていたのはアネキの帰還だったのかも
しれない。俺のアネキと言うのが物凄くブラコンで俺が小さな時はいろいろやられても少ししか抵抗できなかったが最近ではもう簡単に逃げ切れたのだが……多分今では何の抵抗も出来ないのだと思われる。

「ははは、そんな顔するな。愛華に女の子としての常識をいろいろ聞いてみれば良いだろう」

「うーん、正直言って怖いかもなあ。まじで今の俺になら何されるかわからないし」

俺は出来る限り武器を準備しておこうと思った、まあ俺のアネキは見た目は華奢なのだが異常なほど体が丈夫で俺が一番驚いたことは3階のベランダから飛び降りて普通に着地出来た事だった。本当にあれは人間か？何かの間違いで生まれてしまった魔神とかではないのだろうか？

俺がいろいろと考えていると玄関の扉が開く音がして。ツイニキヤガッタと心の中で叫び絶望を味わっていると。帰ってきたのはお母さんだった。心臓に相当悪い……。

結局その日アネキは帰ってこなく俺は風呂に入っすぐベットにもぐりこんで睡眠に入る。まだ風呂とかにはなれるのに時間がかかると思う。自分の裸を見て鼻血が出てしまったのはだれにも言えない事。

次の日の午後1時に誰かが水木家の家に入る、そしてその誰かはまっすぐに俺の部屋に入ってきて俺にゆっくりとちかずいてくる。俺は寝ているのでその人影に気がつく事が出来なかった。

第九話 俺って鈍い？（後書き）

なんだか二日間みてなかったらお気に入り件数が一気に増えていて驚きましたw w w

もしよろしければ、この小説は一話一話がもつすこし長い方がいいなどの要望が当たったらお願いします。

第十話 柚木と静流の話（前書き）

こんにちは先ほど一家の窓ふきとカーテンの洗濯などが終り全てセ
ットし終わったところです。今回は秋が寝ていた時のお話、いわゆ
る外伝つてやつですね。

ところでアクセス解析の話別を見てみた所まえがきをすつ飛ばして
みてる人が結構いるようですね。俺は基本まえがきを見る派ですが
皆さんはどうですか？

第十話 柚木と静流の話

「それで、俺に話と言うのは？」

俺は秋ちゃんのお父さんに話があるとのことで今秋ちゃんの家にいる。

「何から話したらいいものか、俺はあまり他人に説明するという事が苦手だね。とりあえず病気の事について話しておくべきか」

「日光過敏症ですか、重度・・・なんですよね？」

俺がそう聞くと秋ちゃんのお父さんは少しいにくそうに。

「その事なんだが実は軽度なんだよ」

「え？」

「重度と言っておけば君は心配するだろう？それで君はどれほど秋の事を思っているか調べさせてもらったんだ。まあ、君なら大丈夫だろう」

なんか、いつの間にか試されてたらしい。

「あと、秋は今いろいろとあつて精神状態は隠しているが相当不安定だ、それに今まで男として生きてきたわけだから女の事なんてわからないだろう、だから秋は今性別の面で赤ん坊みたいなものだ。そんな無防備な状態だとあんなにかわいい容姿だ、絶対にヘンなやつに絡まれたりするだろう。だから頼む身であつて勝手な事だと思

うが秋を守ってくれないか？男であり今まで男であつた君が男として秋に接してあげればそれでも秋が自分自身で解決するよりもらくなるはずだ。俺から言いたい事はこれだけだ、頼まれてくれるか？返事は今じゃなくていいが」

俺はもう決めていたし覚悟はあつた。あれほどまでに強かつた秋次は、今とても弱い秋ちゃんになっている。それはまるで極薄のなんの補正もかかっていないガラスのように脆いものだ。

「俺が手を出せる範囲。いや、絶対に秋ちゃんを守ります。彼女が一生を共にする、彼女を一生かけて守ってくれるという人が現れるまで俺が守りきって見せます」

「そうか、ありがたいな。案外君が秋を一生かけて守ってくれる人なのかもしれないな」

「なつ、何言つてんですか。俺は彼女を恋愛対象ではみていませんよ」

この人は急に何を言い出すんだろうか、別に俺は秋ちゃんを恋愛対象として見てなんかいない。たしかに秋ちゃんは可愛くて結構素直だし小さいし（？）声も綺麗だしよくよく考えてみたら俺の好みドストライクじゃないか・・・って俺は何を考えているんだ。

「ととととにかく俺が出来る範囲で守りますから心配いらないです」

「そうか頼もし」

・・・ピロロロ、ピロロロ・・・

と秋ちゃんのお父さんの声を電話が遮る。

「つと、すまんなちよつと待ってくれ」

秋ちゃんのお父さんが受話器を取りそれを耳に当て。

「もしもし？」

『あつ、おとーさん？ 私私』

「……………新手の私私詐欺か、切りますよ？」

『つちよ、ひどい。この愛娘の声を忘れるの早くね？ そーそー、メール見たよお。そうだ今帰ってるから』

秋ちゃんの姉さん相変わらず電話だと声が大きくなるな、一応俺との面識があるがもう忘れてるだろうな何しろ小2のときに会ったつきりだからな向こうはもう忘れてるかもな。

「お前はいちいち声が大きくてだだ漏れしてるし話の転換が早い」

『もうっ、それぐらい良いじゃん。それでさ、秋次の事なんだけど……………』

「それはお前に実際に目で見てもらいたい」

『そっか、秋次としては結構つらいんだろうな。私には何が出来るのかな。ってこんなシリアスに考えても仕方がないよね。今まで通りに接してあげるそれが一番だよねやっぱり……………私ま

だ諦めてないかも』

「愛華……それはつまり秋に打ち明けたって事か、だが今は駄目だそのうち秋も今の状況を受け入れるそしてその内慣れる、その時まで駄目だ。それに打ち明けても今じゃ………お前はそれでもいいのか？」

何を話しているのだろう途中からシリアスになっているが、気になるけどそれは俺が入り込んではいけない事なんだろう。

『そつか、今はもう秋次じゃなくて秋か。お父さん、私はあきらめないから今だって』

「そうか、じゃあもう切るな？」

『うん、またね』

- - - ガチャ - - -

「すまん、長話で待たせてしまって」

秋ちゃんのお父さんが俺に話しかけてきたので俺は返事をする。

「いえ、大丈夫ですよ」

「それで、話の途中からのないようだが多分君にも聞こえていただろう………忘れてくれ」

「はい、そのつもりです」

「本当に、君が秋の親友でよかった。さあ、そろそろ学校へ行かないとまずいだろう最後に一つだけ言いたい事があるそれで終わるだ」

何だろう、俺は静かに聞くことにし。秋ちゃんのお父さんが話し始める。

「……………で頼めるか？」

「はい、さっき誓ったばかりですから任せて下さい」

「本当に君には迷惑かけてばかりだな」

第十話 柚木と静流の話（後書き）

なんかちよつとシリアスになっちゃいましたね。まあそれは良いとして。中学編に切り替わったわけですがやっぱり次話かその次あたりから中学編にしたいと思います。とりあえずその話が出るまでは今の位置にしておきます。

第十一話 アネキの帰還（前書き）

なんか今回はずいぶんと文脈とかがぐちゃぐちゃになってしまった
ような……つと愛華の詳細書かなくては。

みずき
水木 愛華

秋の姉でブラコン、今はシスコン。体は丈夫で3階から飛び降り
ても無傷らしくそのくせ結構な美少女で（秋には負ける）ラブレタ
ーなど日常茶飯事だが中身を見た事は一度もなく全てその場で切り
捨てている。

第十一話 アネキの帰還

朝俺が起きると一人の女が俺のベットで一緒に寝ていた。普通の男だっただけなんという幸せだあああとか思うんだろうけど生憎俺は普通の男じゃないとか今となつては男じゃない、それにその女と言うのは俺のアネキだったというオチで俺はアネキが起きないようにそうつとベットから出ようとしたときに俺はなにかが足に引っかかり転んでしまった。

「いつてえ、なんだこれ？」

俺がそれを見ると手で俺が危うく恐怖で失神しそうになったところでその手はアネキの手だった事に気がついた。

「ふふふ、逃がさないわよお」

アネキが転んで倒れていた俺の上に馬乗りになる。

「ちょい、アネキマジで重いからどいてくれ」

「へえ、今じゃもう私をどける事も出来ないのかあ。どうしようかなあゝ襲っちゃおうかなゝ」

マジで危険だ誰か助けてくれ と心の中で叫ぶとその願いがかなったのかお母さんが登場した。

「あらあら、朝っぱらからいちゃいちゃしちゃって、そうだ愛華が帰ってきた記念に写真撮っちゃいましょう」

助けてくれねえのかよ、しかも記念つて。

結局俺は苦しい為涙目の状態でとられてしまい後で見せてもらおうかと思ったが自分の無様な姿を想像してやめておいた。

「それにしても本当に美少女だね、秋」

「う、うん。あんまうれしくねえけど」

「はあ、口調が男のまんまじゃん」

アネキは少し考えた後に再び口を開く。

「よっし、この際口調のこともどうにかしないとね」

「いや、『も』ってなに。一体俺に今回は何すんだよ」

「秋、朝ご飯食べたらず特訓よ」

「だから何の特訓だよ」

結局アネキは俺の問いには答えてくれずに朝ご飯を食べ始めてしまったので俺も食べ始める。そういえばもう俺が女になってから3日もたっているのかと思いながら焼いたパンを食べる。

「よし、秋食べ終わったね？」

「いや、俺まだ二口しか食べてないし」

たしかに前の俺だったらもう食べ切れていただろう、今俺が食べ

ているサイズならだけど。結局俺は相当な少食で6枚切りのパンの半分でおながいっぱいになってしまふ。ただそれでも今の俺は一口が相当小さいので全然食べれない。そういえば昨日気がついた事だが俺は肉はどうやらチキンならおいしく食べられるようだ。結局アネキは俺が食べ終わる前に自室にもどって数秒後にはもう着替えて戻ってきていた。

「よし、ちょうど食べ終わったわね秋。じゃあ着替えてらっしゃい」

とアネキが言ったので俺は着替えてくると。

「なにそれ、そんなんじゃ可愛い容姿が台無しじゃない他に可愛い服とかないの？」

「いや、男が可愛い服とか持ってたらかしいだろうってなに人のズボン下げてんだよこの変態」

「まったく、なんでこんな男物の下着つけてるのよ。あっそうだちょっと秋来なさい」

俺はアネキに連れられ、今アネキの部屋にいる。

「何探してるの？」

と俺が聞くと。

「私が小学生の時に来ていた服、よかったあゝとっておいて。ほらっ」

とアネキがそう言ってとりだしたのはミニスカや肩の出ている服だったり。俺が着るのには相当な気が必要そうな服がたくさん出てきたまさかそんなものを俺に着せるのではないのだろうか？といやな予感がした。そういえば誰かが良い予感、悪い予感、外れるが悪い予感、当たるっていたなあと思うと。

「さあ着なさい」

「はあ？」

「だから着なさいって」

「拒否権は？」

「ナニソレオイシイノ？」

うわあ、この人知らないふりしやがった。突然アネキは俺の肩がしつとつかんだかと思うと一瞬のうちに俺を脱がしたつまり俺はいま一糸も纏ってない姿であつた。

「なつ、何すんだよいきなり」

俺がそういうと。

「ほら、早く着なさい」

とアネキは俺にミニスカを押しつけてくる。俺がいつまでも拒否しているとその内。

「ええい、もう無理やりやってやる」

と俺は結局無理やり着せられてしまったわけで。今女子用の制服を着せられた以上に恥ずかしい状況になっている。服装は白いミニスカに上はくわしい名前はよくわからん肩の出ている服で今の季節の事を考えると。

「寒い、特にスカートが。なんで女子はこんな寒い時期にこんな短いスカートで大丈夫なんだよ」

「そりゃ見かけが第一だからよ」

「俺はそんなもの気にしない」

「可愛い子はおとなしく可愛い格好してなさい」

「断る」

「秋に拒否権はない、だゝかゝらゝ今度はこれ」

とまたアネキは瞬時に俺を裸にして今度はメイド服を着せた。

「なんでコスプレなんだよ」

と俺が突っ込むがアネキはそれが耳に入っていない様で。

「ああ、なんて可愛いの愛しのマイシスター」

まずい、重症だ。なぜこんな重症になってんだと思ったが。多分俺が抵抗できるようになってから俺を思い通りに出来なくなって我慢するしかなくなっただろうな。そう思うとなんだか少しアネキ

がかわいそうに思えてきたので（ナゼ？）今ぐらいは好きにさせてやるか。結局その結論に至って。

「で、今度は何を着ればいいんだ？」

「えっ？」

「今だけだかな、今は好きにしていいいよ」

「いや、もういいよ。ほらこれ着て」

とアネキが最後に出してきたのはパーカーとやっぱりこれだけは譲れないのかミニスカだった。俺はそれを着ると。

「じゃあ、秋買いものに行くよ」

「どこに？」

「どこにつて買いものよ買いもの秋の新しい服買わなくっちゃ。あゝどんな服が似合うかな」

前言撤回やっぱり俺逃げたいです。

第十二話 3人で買い物

結局、俺はなされるままになっていた。

「さあ、天気も素晴らしいほど曇りだし早速出かけよう」

アネキは一応病気の事を知っているのか。まあ、知らなかったら知らなかったで困るけどな。

「そだ秋、母さんとかのことはお母さんって言ってるなら私の事はお姉ちゃんって呼んでよ」

「やだ」

「拒否早、じゃあ秋の服は露出度の高い奴に」

「この悪魔めえええ」

「ふっふっふ、いやなら私の事はおねえちゃんと呼びなされ」

そう言っアネキは俺を持ち上げる。

「ちょ、おろせえ」

「昔はこうやってやったら喜んでいたのに。お姉ちゃんの事嫌いになっちゃったの?」

そついつアネキは泣くふりをする。

「だゝ、嘘泣きも駄目。いい加減おろせ」

と俺は力の限り暴れてみるがそれは無駄なようでアネキはいつまでもおろしてくれなかったがここで救世主が現れた。

「何やってんだよ」

と後ろから声がして振り向いてみるとそこには呆れた顔をして静流がたっていた。

「あつ来てくれたんだあ、さっすが秋の彼氏だねえ。姉様の言う事をちゃんと聞くよあ」

「いや、彼氏じゃないし。で、俺はなんで呼ばれたんですか？」

たしかになんで静流を呼ぶ必要があつたのだろう？俺がそう思っているのアネキが静流の耳元でなにかを囁いているようだった。

「なつ、違いますよ。そんな風に思つてませんから」

「嘘だねえゝ、だつて静流君嘘つくときつて声が普段より微妙に低くなるんだよね。この私を欺けるとでも思つていたの？」

「良くそんな事わかん俺なんて全くわかんねえぞ」

と俺がそついうと静流が。

「まあ、お前には嘘ついたことないしな」

へえ静流つて俺に嘘ついたことなかったんだ、それなら納得納得。

ところで何の話をしていたんだろうと思って俺が聞いてみると。

「べ、っべつに秋ちゃん聞いてもなんも面白くない話だから」

「そつか、そういえばなんでちゃんづけなんだよ？普通に呼んでくれないと違和感がすごいんだが」

「いや、女の子を呼び捨てするのはどうかと思って」

「静流君は恥ずかしいのよ」

まあ、それはわかるような気がする。俺も女の子を呼び捨てにするのは少し恥ずかしいような気もするしな。

「はっ恥ずかしくなんかない。そこまで言うのなら呼んでやろう、秋つつ」

呼んでくれたのは良いがなんで叫ぶ、そこで歩いてサラリーマンなんてびっくりして腰抜かしてるぞ。それに呼ばれた俺の方が恥ずかしいだろ。

「さあ、早速買いものに行くか」

アネキはそんなことお構いなしだ。俺と静流はそのあとについていく。

近所のデパートにつくとアネキが真っ先に向かったのは洋服店売り場だった。

「ほら、秋これ試着して。あとこれと、それと、これも」

と、どんどん服を渡されていく。俺はアネキの着せ替え人形だと勘違いされているんじゃないだろうか？

「静流、これどうおもう？」

俺はまず一着目を着て静流に聞いてみると、静流が少しフリーズした。

「変だよな、やっぱり。元男の俺がこんな可愛い服着てたら気持ち悪いよな」

「いや、良いよめっちゃいい。お前可愛いよ」

「お、秋にあうじゃん。はい今度はこれとこれとこれね」

と今度は5着位おいていく。俺がそれを試着している間、ずっとアネキの姿がなかったのだが試着が全部済んだあとにアネキがなにか棒みたいなものをもってきて帰ってきた。

「はい、秋これ」

アネキが差し出してきたものの包装紙(?)をはがすと中から出てきたものは黒い傘だった。

「何この傘？」

と俺が聞くと静流が。

「それ日傘じゃねえの？」

「お、よくわかったね。ってまあその鈍い人が気がつかないだけか」

「鈍いつて俺？」

と俺が言つと二人は顔を立てに振っていた。

結局俺の服を10着程度と下着を同じくらい買ってから俺たちは洋服売り場を出ていまちよつとゲーセンによつてゐる。

「俺を連れてきたのはこういうわけか」

いま買った物が入つてゐる袋など静流が全て持っている。

「文句言つなら秋に持たせる？」

「文句じゃない、だいたい秋はこんなの持てないだろうが」

「そういえば秋の今の力つてどれくらいなの？」

そういえば今の俺の限界に挑戦したことないからわかんないなあ。

「よし、これで測つてみよう」

とアネキが指さしたのはなんか変なやつだった。棒みたいなものをもつて最初は軽いが時間が経つにつれて重くなりそれが地面についたときにどれくらい力だったのか測るゲーム機だ。

俺がそれに挑戦してみることにした。結果。

「秒殺だね」

とアネキが言った通り数秒で俺は脱落してしまった結局それで俺の力は小学生並みらしいという事がわかった。まあ体も小学生並みだしあまり問題ないかなと思っっている。

「おれちよつとその自販機でジュース買ってくるよ」

と静流が言つてアネキが私も行くよと言つて俺は取り残されてしまった。俺はB I H A Z A R Dを見つけてそれをやろうとそっちの方に駆けだすと急に角から出てきた人にぶつかってしまった。

「いつてゝ。あ、すいません」

俺はぶつかった衝撃で転んだまま謝った。

「いやいいよ、それより君可愛いね。お兄ちゃんがおごつてあげるから一緒に遊ばない？」

と誘ってきた。ナンパつてやつか？俺はあわてて逃げだそうとするが肩をがっちりつかまれてしまい逃げ出せなかった。俺は声をあげて助けを求めようとしたが怖くて声が出なかった。やっぱり俺女になってから怖がりになってるなと頭の超片隅で思い。そうとうまずいと思った時。

「ぐはっ」

そいつが急に横に吹っ飛んでいき俺は解放された。俺は少しそこで固まっていたがすぐに誰かが助けてくれたのだと思いその人を見

るとその人はあいつの顔を蹴った姿勢のままでいた。茶髪でリングをつけていていかにも不良って感じだった。

蹴られたやつが起き上がり蹴った人の胸倉を掴む。

「てめえ何すんだよ」

そう言う。

「嫌がる女の子を無理やり連れて行こうとするなんて下等生物がする事だ。その手を離せ下等生物」

と蹴った人が蹴られたやつを腕をつかんだかと思うとそいつを地面にたたきつけた。

「ってえ、畜生。おぼえてやがれ」

そう言って走って逃げていく。ずいぶん古いアレだなと思っ

ている。

「大丈夫だったか？もう怖くないよ」

と蹴った人が言った。

「あ、ありがとうございます」

「気にすることなんかない。君みたいな可憐な弱い女の子を守るのが男の役目だからな。俺は、っと名乗るのはもしまた会えたらにしよう。じゃあな」

といってその人はどこかに行ってしまった。

「あいつ誰？」

と静流とアネキが戻ってきた。

「さあ、でも悪い奴じゃないと思う。助けてくれたし」

「助けてくれたってなにかあったの？とそろそろお昼時か。詳しい話はそこのファミレスでお昼でも食べながらにしようか」

とアネキが指を差したファミレスに俺たちは向かう。

第十二話 3人で買い物（後書き）

今回は少し長くなりましたね。

感想&要望等どしどしお願いします。

第十三話 俺が気がつかない変化（前書き）

もうすぐ寝ようと思ってるんで今回はあとがきとか短縮しますw
w

第十三話 俺が気がつかない変化

「ふう〜ん、つまりナンパされたって事か〜」

「う、うん」

俺はあの後にさつき起きた話を話した。なんだかアネキは面白そうにその話を聞いていた。静流はなんか心配していて「変な事されなかったか？」とか聞いてくる。

「静流、大丈夫だったって何度も言ってたんだろ。お前は俺の母親かよ」

と一度言つとそれ以上しつこく言つてこなくなったが今度はアネキが「初ナンパされる気分はどうだった？」とか聞いてくる。マジでその話はもうやめてくれ。と俺が思っているとウェイターの人がなにかを持ってくる。

「ギガ盛りチョコレートパフェになります」

と今の俺の顔よりも大きいパフェを持ってきた。アネキはそれを嬉しそうに受け取りそれを一口食べる。

「うまあ〜」

と言っている。俺は本来甘いものは嫌いだがあんなにうまそうに食べてるアネキを見ると味見程度に食べてみたいなと思ってしまう。前はいやだった甘い匂いも今ではすごい良い匂いに見える。そうだな今の俺は前の俺と味覚が違うんだ。もしかしたら食べられるかもし

れない。結局俺は耐えきれなくなつて。

「アネキ、一口貰つていい？」

と俺が聞くと、アネキは嬉しそうに。

「うーん、どうしよっかなあ・・・つとそうだつ今が秋と間接キスする絶好のタイミングか？よし、秋おねえちゃんが使つたこのスプーンでたべなさ」

とアネキが言い終わる寸前にウェイターが来て。

「申し訳ありません、こちらのパフェは大人数用でしたのにスプーンが一つだけで・・・。。もうなんと謝ればよいか、今頃ですがスプーンをお届けにまいりました」

謝るのは良いんだが言葉がぐちゃぐちゃになつてゑぞ。お届けつて何ぞ、普通お持ちしましたじゃないのか？それにどうやらアネキの怒りを買つてしまったようだな。まあ流石にアネキでも他人を襲うような事をしないが怒りのまなざしで睨んでいる。ウェイターは幸運の事かそれに気が付いていない。

「一口頂きまあっすつと」

俺は結局ウェイターが持つてきたスプーンを使ってパフェを一口食べると。甘い味と匂いが口の中で広がって、アイスの部分がひんやりと冷たくつておいしかった。どうやら俺は甘いものが好きになつていたようだ。

「秋顔が幸せそうだねえ、もっと食べる？」

「えっ、良いの？」

「おっけおっけ、静流君も食べる？秋がが使ったスプーンで」

と姉が冗談を言うと、さっきまで寝ていたのかと思われる静流ががばつと体を起こすと。

「俺もく……やっぱいい」

そうか、静流もあまり甘いものが好きじゃないんだろうか？俺がそう思ってた一緒にアネキとパフェを食べ続ける。俺の顔よりも大きかったパフェはあとかたもなくなつた。そして俺の腹は悲鳴をあげている。この事も考慮すべきだった、甘い物の食べ過ぎでむねやけになりおまけに冷たい物の食べ過ぎでおなかを壊してしまった。俺は結局そのあと腹が痛すぎたのでそこで解散となり帰りは姉におぶってもらつた。

家に着き、いまだに俺は気分が最悪だったのでもう風呂に入って寝てしまう事にした。俺は風呂場の手前の更衣所で服を脱ぎ。

「なんだかんだいってもう慣れちゃったな」

と呟く、実際まだ1週間も経過していないが人間は簡単に慣れる動物だという事を実感した。でもさすがにこれは早く慣れ過ぎてないか？と思つた。実際これは慣れるのが早すぎで他にも俺が変化している事があつたが今の俺には知る由がなかつた。

俺が風呂に浸かっていると誰かが更衣所に来て脱ぎ始める。

「なつ、アネキ？俺今入ってるぞ」

「別にいいじゃない、久しぶりに一緒に入ろうよ」

とアネキは脱ぎながら言う。

「いや、久しぶりにとかじゃなくってそれはまずいだろ」

「まずくなんてないよ。だって、私たち姉妹じゃん」

う、そうだった。今の俺は女であるからして何も問題はないのだが、でも問題はあるのだ。そう思ってるうちに扉がガラツと開いてアネキが入ってくる。俺は運悪く入ってきたアネキの体全体を見てしまった。俺は恥ずかしくなり顔を湯に沈める。

「最後に一緒に入ったのいつだったけ？」

とアネキが聞いてきた。たしかあれは7年くらい前の話だった気がする。

「多分、俺が小2の時だと思う」

「そっか、もうそんなに立つのか……」

しばらく沈黙が続きアネキが浴びてるシャワーの音が響きわたる。その沈黙を破ったのは意外にも俺だった。

「ねえ、髪の毛の洗い方教えてくれない？」

「お、任せて。お母さんは教えてくれなかったのか」

「うん、流石に、ね」

「じゃあ、こっちに来てよ」

とアネキは手招きするので俺は湯船から出てそっちの方に行く。

「秋は体も髪も綺麗だね」

「ありがとう」

「ふふつ、本当に綺麗だよ。あの傷も……なくなっちゃったんだね」

とアネキが悲しげに言う。俺はそれを聞いて腹部を見てみるが本当に傷がなかった。その傷というのは俺が小さいときに何かで怪我をしてしまったらしい。どうやらその原因がアネキにあるらしく今も気にしているらしい。ちなみに俺はその時の事はもう覚えていなくどうやって怪我をしたのか覚えていなかったし誰も教えてくれなかった。

「それにしても、ムダ毛の一本も生えてないね、それにホクロすらない。きれいすぎてちょっと不気味かも」

たしかにそれは少し不気味かもな、でも綺麗なのは良い事なのだろうと思う俺はこれでもいいと思った。

そして俺はアネキに髪と体の洗い方を教えてもらい。風呂から出る前にアネキに抱きつかれたときにそれから少しの間パニクってしまっただが布団に入ったら安定した。

第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・（前書き）

今日はギリギリその日のうちに投稿できましたね。そう言えば Fa
te zero を今見ているけどまだ面白さがよくわからない様な
気がするつと神様のメモ帳DLおわた。よし明日は友達に進められ
ていたはがないDLしよう。

第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・

今俺とお父さんとアネキの3人で駅のホームにいる。

「やれやれ、もう行ってしまうのか」

「うん、今回は秋の様子を見に來ただけだったから。お父さんは体に氣をつけてね、あとはお母さんに宜しく頼んだよ。最後に秋」

「なんだ？」

俺はアネキに呼ばれて返事をして少しアネキに近づく。

「秋は父さんや母さんのことをお父さんとお母さんって呼んでるんだって？それなのに私だけアネキじゃやだから今度会ったら一番最初にお姉ちゃんって言うてね。それともう少し言葉をと行動を女の子っぽくしなさい」

「女の子っぽいとかわかんないけど」

「自分がどんな女の子が可愛いと思うか、その思った事を目指せばいいんだよ。お正月にまた会えるけどそれまではバイバイだね。じゃあね、秋」

俺は最後にアネキに抱きつかれた。アネキに（普通の状態で）抱きつかれるのは慣れているから俺も抱き返した。

「じゃあね」

と俺が言つとアネキは名残惜しそうに腕を離し、手を振って電車に駆け込みアネキが入ってくるのを待っていたように扉が閉じる。俺も手を振り返し電車が見えなくなるまで見つめていた。

「さ、秋。晴れないうちに帰ろうか」

「うん」

今日も運よく曇りだった為日傘は必要なかった。しかし午後から晴れるというので俺たちは急いで帰ることにした。お母さんは今日も仕事だった為アネキの見送りは出来なかった。今頃だけど本当にお父さんは何やってるんだろうと思う。

俺たちが家に帰る途中に静流に会った。静流はどうやら午後暇だったらしく俺は家に連れ込んだ。俺は静流を自分の部屋に入れるベきか躊躇ったがいずれは入られてしまふだろうと思ひ入れることにした。なぜ俺が出来れば入れなくなかったのかというと、実は俺の部屋は姉の手によりたった一夜で男の部屋の面影なんて何もない完璧に女の子の部屋と化してしまった。

「静流、一応心構えをしておけ。男が入るのには相当つらい事になつてゐるからな」

「ああ、わかった……いくぞっ」

静流が俺の部屋の扉を開け俺の部屋の全容が視界に入ったところで止まる。

「……………部屋間違えました」

と静流は何事もなかったようにそう言って俺の部屋から出て行くとする。それを俺は慌てて止める。

「間違えてないから、言っただろお姉ちゃんにあんなにされたって」

「いや、でもあれは男としては抵抗があるぞ。ん、お前お姉ちゃんなんて言ってたっけ？」

その事が、俺は答えようとする。

「ま、正直どーでもいいんだけどさ。マジでこの部屋入らないとだめ？」

「うん、だめ」

俺がそう言うのと静流は諦めたのようか俺の部屋に入り床に腰掛ける。

「で、何やる？生憎W iはないからP 3な」

俺はそついいながら2人プレイが出来るソフトをどんどん出していく。静流はB I H A Z A R Dを選び二人でそれをやることにした……が。

「秋、怖いなら別のでもいいぞ？」

と静流が言ってきた。

「べっ、べつにこわがるがってんなんかあねえよよ」

と俺は言い返す。

「そんなに手が震えて汗タラタラ流していちいち敵が出てきたらびくっている状態でそんなこと言われてもな」

実際俺は今静流が言ったような状況だった。前は「ふはははは、このザコ共があゝ」とか言いながらショットガン撃ちまくってたのに、どうやら女になってそれも駄目になってしまったようだ。俺がぎりぎりな思考の中そう考えていると急に出てきた虫型の敵に驚いてしまい。

「キヤッ!？」

と私は静流に抱きついてしまった。

「うわっ、いきなりどうした秋」

「ご、ごめんなさい私怖くって」

と私は慌てて静流から離れる。

「秋、言葉が……」

「えっ? どうした俺なんか変だったか?」

「いや、やっぱ気のせいだ」

どうしたんだろう、静流がずいぶん焦ってるような気がする。俺が静流の顔を見ると少し顔が赤くなってるような気がした。この部

屋暑いか？もしかしたら暖房が利きすぎてるのかもしれないと思って俺は設定温度を下げることにした。

「ちよつと設定温度下げるな？」

「え、なんで？」

「なんでって、お前熱くないのか？顔赤くなってるぞ？」

と俺は言う。もしかしてこいつ熱でもあるのかと思ったが多分違うだろうなと思ったけど一応確認しておくか。

「お前もしかして熱でもあんのかちよつと見せてみるよ」

と俺はそう言っで静流のおでこに俺のおでこを当てる。なぜそうするのかというと手で触ってみるよりもわかりやすいからだ、俺がおでこを当てるに静流はめちゃくちゃ熱くなっている事がわかった。

「お前めっちゃ熱いぞ、大丈夫か？すぐに帰ったほうがいいだろ」

「そうだな、じゃあ俺もう帰る」

ととぼとぼ歩いて行く静流を俺は見送り自室に戻りなんか妙に疲れたような気がしたので俺はそのまま眠ることにした。

第十四話 ゲームの好みも変わっていた・・・（後書き）

感想や要望 e t c . . . いろいろとお願いします。

第十五話 仲間！（前書き）

神崎 稔 かんざき
みのる

クラスメートの男子。容姿はイケメンで中身はオタクで下ネタを良く言う為にまったくもってモテていない残念な人。ちなみにオタク部……じゃなくてアニメ研究部だ。

氷室 弓狩 ひむろ
ゆかり

クラスメートの女子。委員長で大人っぽく結構モテている、人一倍頑張り屋で負けず嫌いでもある。2年にして弓道部のエースだ。

第十五話 仲間！

気がつくと朝だった晩御飯は食べなかったんかいと言われそうだが実際俺は晩御飯を食べなくてもおなかがすかないのだというかこの体になつてから疲れている時は食べるのもつらいのだ。それゆえ俺は晩御飯を食べずにして寝ていたわけで、っと俺はだれに言ってるのだろうか？と思いながら時計を見てみると案の定、まだ早朝だった俺が男のときはこの時間に起きるなんてありえなかったしなあ。俺は二度寝をしようと思ったが全く眠くならなかったので俺はもう着替えて学校に行くことにした。

「うわっ！」

俺は制服を取ろうとベットから降りて歩きだしたら床に置いてあったバッグにつまずいてしまった。受け身を取ろうとするが腕に力が入らなくビターンと倒れてしまった。俺は無言で起き上がり制服と下着を手取る。この体に慣れたと言ってもやっぱり男としての意識はなくなつたわけでもなく少しながら興奮してしまう。自分の体を見て興奮するなんてどんな変態だよと思いながら俺は着替え日傘を忘れずに学校に向かう。

始めは日が出ていなかったが途中から出てきたので俺は日傘をさして登校した。まだ早かったので誰にも見られなかったのは学校までの道だけで学校に入ると朝練をしている人がたくさんいた。通り過ぎていく人がみな俺の事を凝視していくのはあまり気持ちのいい事じゃなかった、中には俺の胸を見て行く変態な男がいると思つたら女で見て行く人もいた。

男のときはあんまり感じなかったが、女だと結構相手の視線とか

がわかるのだ。

「誰だよあの女の子」

「めっちゃ可愛くね、うちの学校にあんな子いたの？」

「日傘差してるけどどっかのお嬢様かな？」

と通り過ぎていく人たちがそんな話を話していた。俺は煩いなと思いながら教室に向かっていく。教室のドアを開けると一番乗りだ、と思ったが先に来ている男子が一人いた。確か、名前は・・・神埼稔といったか、見た目はイケメンなのだが中身はオタクという理由でモテてない結構残念なやつである。

「あつ、秋ちゃんおはよう」

と稔が挨拶をしてきたから俺も挨拶をすることにした。

「おう、おはよう稔。それとちゃん付けはやめてくらないか？」

「あ、うんわかった。でも本当に君って可愛いね」

いきなり何を言い出すんだこいつは俺に可愛いとか。一応俺は男だったわけだから気持ち悪いと思ってしまふ。

「可愛いとか気持ち悪いからやめてくれないか？」

「君が男言葉をやめてくれるんだったら良いよ？」

「いや、なんでそうなるんだよ。お前が勝手に呼んでんだろ」

「うーん、じゃあ・・・デートいつか」

「ふざけるなあ」

と俺は叫んでいた。その声に今入ってこようとしたクラスメートの女子が驚いていたのか眼を丸くしていたが。

「稔君、なに秋ちゃんいじめてるのよ。男が女の子をいじめるなんてサイテーよ秋ちゃんあっち行こう」

と俺はその女子に何故か女子トイレに連れて行かれた。

「ねえ、ここ女子トイレだね？俺が入って大丈夫なの？」

「えっ、問題ないでしょ」

「うんうん、秋ちゃん女の子だし」

はあ、完璧にもう男として見られてないな、確かに少しでも男として見るという方が無理な事だ。

「秋ちゃんに言つとく事があるんだけど、これからはトイレは女子トイレ、着替えは女子更衣室ね」

「え、俺が使っちゃっていいの？」

普通元男なやつがそんなとこにまじったら何をするかわからないとか言う理由で一人だけ別のところなのかと思っただけ。

「うん、秋ちゃんがいない間に皆で話し合って……ほら皆秋ちゃんを受け入れるって言ったでしょ、だから出来る限り一般の人として秋ちゃんにとってはつらいかもしれないけど一般の女の子として扱う事にしたの。それで秋ちゃんが元男っていうのを知っているのはクラスの皆だけ。それ以外の人は秋次君は転校して代わりに秋ちゃんがこの学校に来たって設定になってるから秋ちゃんも気をつけてね。例えば言葉使いだけでも出来る限り男でも女でも違和感のないようにして一人称は私だと難しいかもしれないから僕とかはどう？」

「皆俺の事をずっと考えててくれたのか？」

「あつたりまえでしょ、大切なクラスメート……仲間なんだから。それに稔君も秋ちゃんを怒らせる事を言ったかもしれないけどそれが彼なりの秋ちゃんへの思いやりなの。あんなふうに言われたら秋ちゃんだって言いたい事言い返せるでしょ？だから彼の事をちゃんと相手してね、さっきは私も秋ちゃんの為だって気がつかなかったけど。だから安心していいんだよ、何かあつたら私たちに甘えても良いから仲間を頼ってね」

そうだ、今思い出したけどこの人はうちのクラスの委員長の氷室弓狩だ。皆本当に俺の事を心配してくれていたんだ、なんだかとても嬉しかった。無意識のうちの涙を流していた俺を抱きしめてくれた弓狩さんは温かった。

第十六話 日常の再開（前書き）

昨日は投稿出来なくてすいませんでした、いろいろあったんでww

とりあえず「メリクリ」とでも言っておきましょうかね。

やまだ
山田 太郎

クラスメートのMOBキャラっっ！っ！以上っっ！っ！

第十六話 日常の再開

あの後は、普通に教室に戻った訳だが稔以外は怖いほど普通に接してくれた。あくまで俺にとってだけだな。普通は男は男同士であつまって女は女同士であつまって話をしたりするだろ？ だけど俺にとっての普通は男と話す事であるので男たちの中に女の子が一人混じっている状況で女が苦手な男は俺だとわかつているが上手く話せないやつとかもいた。まあそれは俺にもわかる。普通男は女と話す時少しながら緊張する、だからだ。

朝のホームルームが始まる前に静流がギリギリで教室に入ってくる、朝練がある為、静流はいつもそうだった。本来は俺も野球部で朝練があるのだがこんな事になってしまっているのしばらく休ませてもらっている。

「おはよう静流」

「え？ ああ、なんだ秋か」

俺が声をかけると静流はそう返してきた。

「なんだとはなんだ」

と俺が聞くと静流は汗を拭きながら。

「いや、女子の声であいさつされたから誰だっと思ってさ。普通挨拶されないじゃん」

ああ、なるほど。でもな静流お前はたぶん勘違いを一つしている。

お前が声をかけられないのは女子がお前に声をかけるのが恥ずかしいからなんだよ。こんのリア充めっ、っと前の俺は思ったかもしれないが今の俺は女な訳で正直そう思わなかった。まったくもって理由がわからんのだが……。

それでだ、今頃すぎるのだが俺は今日テストがある事を知った。小テストとか確認テストとか生易しいものではなく定期テストだっつつ！俺はまったくもって忘れていたから勉強していない。そもそもこんなことになっても冷静に勉強出来る奴がいると思うか？いや、絶対いないね、もしいるのなら俺はこの場で命を捨ててもいい。そんな事で俺は全く勉強していない。幸いにも俺の前の男子、名前は山田太郎だ。そいつに今回の範囲の問題とかをまとめたノートをパッと見させてもらった。結局そんなんでまともに勉強出来ないまま1時間目が始まるうとしている。さっき見せてもらった問題がそのまま出たとする。けどパーっと見ただけじゃ普通覚えられないだろう。まあ探 学園Qの瞬間記憶能力でもあれば別だがな。テストは受ける前から悲惨な事は検討がついた。

「秋、そんなにうなだれるなっ」

「お前はいいよなあ、俺はこんなことになって勉強以前の問題だったんだぞ。お前が女になればよかったんだあ」

「俺が女になっても惚れるなよ？」

「惚れねえよ」

結局、最後の休み時間もこんなバカな事をして過ごしてしまった。

1時間目は理科の問題だった、テストを配つてるときも俺はうなだれていたが用紙が回ってきてそれが目に入った瞬間に俺は意識が戻ってきた。あれ？ほとんどわかる？なんとさっきの山田のヤマが恐ろしいほど当たっていたのだ。そのおかげで俺はほとんどの問題が出来た自信があった。しかし、この体は記憶能力もいいのか。それはこの先とっても嬉しいな、だって少し勉強するだけで頭に入るんだ。この後のテストも簡単に解けて昼休み屋上で昼飯を食べている。学校の屋上が開いているのはアニメや漫画の世界だけのはずなのだがこの学校は昼休みのときは開放している。おかげで俺と静流はいつもここで昼飯を食べる事が出来た。今日もここで食べているのだが窮屈だった。何故かといういつもは俺と静流の二人だけなのだが今日は学校中の非リア充の男という男が入れるだけ屋上にあつまっていて俺は物凄く話しかけられた。

「君名前はなんて言うの？」

とか

「彼氏とかいるの？」

とか

「冗つつつ」(？)

とかいろいろと話しかけられてしまった。どうやら静流も質問攻めにあってるのかと思っただが。

「反則だっ！」

「抜け駆けは万死に値するぞ」

「裏切り者には死あるのみだ静流を処刑しろ」

とかいろいろ責められているようだった何故だかは全くわからないが。俺は静流にもう何度も助けられているのでここでちょっと助けてやろうと思った。

「みなさんごめんなさい、私は彼氏と一緒に教室に戻りますので」

と言って静流の腕を引っ張って屋上を出て行く。ちょっと後ろを見てみると何人かが膝についてこんなポーズ or zをとっていた。

俺たちが人目につかない廊下に来た時に静流が急に口を開いた。

「秋、おつ俺が彼氏って言うのは？」

「ば、ばか演技に決まってるんだろ何本気になってんだよ」

「そっか、嘘か」

そう言う静流は少し悲しげだった。俺は急にさっきの事を思い出して恥ずかしくなって体中が熱くなってドキキしてしまった。俺はそつと静流の顔を見ると俺も少し悲しい気持ちになってしまった。

「お前が悲しそうにしてると俺まで悲しくなってくるからそんな顔やめろよ」

と俺が言つと、静流は急に俺の両ほっぺを掴んでひっぱって無理やり笑顔っぱいのを作らせられた。

「お前はやっぱり笑ってる顔が可愛いよ」

俺はまたドキドキしてたぶん今顔が真っ赤だろう。まさか俺はこいつに惚れているのか？いやそんなハズは断じてない。俺はそう自分を思い込ませ静流の手を払う事にした。

「はっはなせこのバカ」

俺が静流の手を払うと遠くからたくさんの足音が聞こえてそのほうを見ると屋上にいたたくさんの男子達がこっちに向かって走ってきていた。

「秋にげるぞ」

静流はそう言って俺の腕を掴んで走り出した

第十六話 日常の再開（後書き）

最近はヴァイスシュヴァルツっていうカードゲームにはまってしま
いAB!とクドわふで組んでいましたがFate zeroもはま
ったのでデッキ作ってます。ニコ生で凸待ちしてる場合があるので
気がついたら宜しくです。

第十七話 伝説の〇〇（前書き）

梢、正輝、大河

秋と静流の友達。MOBキャラ以外で使用用途が今のところないので名前のみ。

第十七話 伝説の〇〇

俺たちは廊下を走って教室に入り込む。流石に他クラスの人が入ってこれないが同じクラスの人たちは入ってこれるので多少の覚悟をしたが俺がクラスに入ってきたときの光景を思い出した。

「あれ、皆教室内にいる？」

俺たちが教室に入った時にはもう皆が教室の中にいたのだ。先回りをしようにもある人物以外にどこに行こうとしていたか先読み出来る訳がないし……。

そこで、俺は弓狩さんの言葉を思い出した。

（秋ちゃんへの思いやり）

これが皆の俺に対しての思いやりなのか？よく見ると他クラスに入り込もうとしている人が結構いるが必死に仁王立ちしている人、ちらほら見える。「皆ありがとう」俺は心の中でそう言って静流といつも一緒に弁当を食べている梢、正輝、大河の三人の所に向かっていく。三人が向かい合う感じに座っていたので俺は正輝と大河の間に割り込む感じに座ると。

「うわっ」

と二人同時に驚いた。この二人は普段から女子に慣れていないので驚く事がわかっていた、だから俺はその驚くのが見たくってあえてそうしたのだ。梢は少し俺の下の方を見た後に

「お前、胡坐かいてるとその白いものが見えるぞ」

と俺に向かって言ってきた。白いもの……なにか真っ白なもの朝見た気がする。なんだっけな。俺が少し考えた後に一瞬思考がフリーズする。まさか、と思い俺が視線を下に向けるとスカートからパンツが見えていた。俺は物凄く恥ずかしくなっていく。

少し経って梢がまだ見ているのに気がつき俺は赤面している顔で梢を睨み。

「ばつ馬鹿、何いつまで見てんだよ」

その言葉を聞いた周りの数人の女子が梢を拉致って行き、その後絹を引き裂くかのような悲鳴が聞こえたのはだれもが恐怖して疑問に思ふ事すらできなかった。

昼休みも終わり午後のテストもなんか全部埋めてどうせほぼ間違えただろうなあとか思いながらHRが始まる。

「ええと、皆さん明日がプール開きですのでしっかりと水着を持つてくるように、以上っ」

相変わらずめんどくさそうな副担任だなと思ったのもつかのま。えっ？プール今秋だぞおい、俺の名前じゃなくて季節な。秋にプールなんておかしいだろそりゃ。

なにかの聞き間違えかと思って俺は静流に聞くと。どうやらうちの学校のプールは温水のようだ。まだこの体にすら慣れていないってのにプールなんて冗談じゃない。あんなぴっぴっちな女子用水着なんて着たくなんかない。いや、でもそう言えば。俺は急いで携

帯を取り出し明日の天気を確認する。

「やったあ、明日は快せ」一応言っておくが室内だぞ」

と静流の言葉により俺は最後の希望を絶たれてしまった。そうだ、温水の時点で気が付くべきだった。外で温水なんて（作者は）聞いた事がない。あつたとしても（作者は）そんなもの知らないさ。

俺はHRが終わった後、静流は部活があつたので一人で家まで帰り仕方がないのでアネキに……。もうお姉ちゃんって言つた方がいいのかな？俺は結局これからお姉ちゃんと言う事にして電話をかけてみた。

「あゝ、秋いゝどうしたのゝ愛しのお姉ちゃんの声が聞きたくなつたのおゝそれなら毎日かけてきていいんだよおゝ」

「違うつて、その……。お姉ちゃんが昔着てた水着ってまだある？」

「秋、私の水着を着たいほどまでに愛していてくれたのね。ごめんねお姉ちゃん秋がそこまで私の事を愛してくれているなんて気がつかなか」

「だゝかゝらゝ、明日プールで俺は女子用の水着なんて持ってないから借りようとしてるんだつて」

「わかつたから、叫ばないで。まだ耳がキンとしてるよ。私の部屋のクローゼットのたんすの下から2番目に入ってるからそれ使つて。あ、先生に呼ばれたからイチャ電はまた今度ね」

- - - ガチャ - - -

「イチャ電って……」

俺は姉が言っていた通りクローゼットの下から2番目を開けるとそこに水着があった。俺はそれを取り出して広げてみるとそれは。

「こ、これが……伝説の旧型のスク水ってやつか」

俺はそれを持って自分の部屋に戻ってそれを着てみる事にした。

着てみると思った通りぴっちりで全身を鏡で写してみた。女子の水着姿をあんまりじつと見た事がなかったので俺はすこし顔が赤くなってしまった。

その時扉がガチャと開き一人の男が入ってきた。

「ななななな、しつ静流」

第十七話 伝説の〇〇（後書き）

少しの間停止してしまいましたがまた再開します。何故停止していたのかというと秋のイラストを描いてみようと思い新品のペンタブのペンを片手に書いてみた所百回くらい書いて百回くらい書きなおしてもうまく書けなかったです（；　；）（数は相当盛りましたwwww）

さあ、今回は水着姿の状態で静流が秋の部屋に入ってしまった状況から始まります。実はずっとお母さんが秋の事を呼んでいたのですが恥ずかしさのあまり全く耳に入ってなかったわけであり……。次回もお楽しみにっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088z/>

秋の夕暮れ

2011年12月27日23時48分発行